

プレースメント・テスト複数回受験者の 得点推移と習得タイプ

酒 井 たか子

I. はじめに

筑波大学留学生教育センターでは日本語の授業を受ける学生に対してプレースメント・テストによるコース分けを行っている。1985年秋からはプレースメント・テストの結果をコース分けに使用するだけでなく、さまざまな方面からの分析を試みている。¹⁾

本稿では、その分析の一環として個人の継時的側面に焦点をあてる。複数回にわたってプレースメント・テストを受けた学生を対象に、その得点の推移から下位テストごとの習得のしかたと、学生個人個人の日本語能力の変化の過程及びその背景について検討してみたい。

II. 方 法

1. 対 象

筑波大学留学生25名（男13名 女12名）。プレースメント・テストを受けた学生のうちから1986年4月および1986年10月の2回続けて受けた学生を抽出した。出身別では台湾7名、タイ3名、アメリカ、韓国、フィリピン各2名、イギリス、イラン、インドネシア、スペイン、ナイジェリア、ニュージーランド、ブラジル、香港、メキシコ各1名となっている。

2. 分析の方法

2-1 プレースメントテスト

第1回 1986年 4月（以後P86Sと称する S : spring）実施

第2回 1986年 10月（以後P86Aと称する A : autumn）実施

得点配分は以下のようになっている。

読解問題 50点

聴解問題 50点

文字問題 50点

文法問題 50点

語彙問題 50点

合計 250点

上記対象者のうち2名は1985年10月（以後P85Aと称する）のテストも受けているので分析に加える。

3回のテストは基本的には同一のものであるが、差替えや修正を行った問題もある。なお、1986

年4月に追加した「読解」10問、および1986年10月に追加した「文法」10問は比較の都合上省いてある。また、図の中で「聴解」「語彙」「文法」「読解」「文字」をそれぞれLIS, WOR, GRA, RED, LETと略す場合もある。

P86Aでは「語彙」と「読解」を受けていない学生が各一名あり適宜データから外した。

2-2 担当教師へのアンケートとインタビュー

授業を担当している教師に、一人一人の学生について、コースの適・不適、性格や授業態度などを質問紙に記入してもらった。情報がさらに必要などときにはインタビューを行い学生に関するコメントを得た。

1986年9月および1987年2月の2回実施。

2-3 コースの成績

コースによって成績が出ているものはそれを参考にした。成績は上からA B Cで表す。

Ⅲ. 結果および考察

1. 下位テスト別得点差の特徴

25名のP86SとP86Aの下位テスト別得点差はTABLE 1に示した通りである。(「語彙」と「読解」は24名) 得点は平均4.8点から13.0点上昇している。t検定の結果、P86SとP86Aの間には合計と5つの下位テストすべてに1%水準で有意な差が見られた。

下位テストの中では「読解」の得点の上昇が一番大きい。これにはテストの実施方法の違いによる影響が含まれている。原則としては、下位テスト別に制限時間を設け、一つのテストが終わる度に問題文と解答用紙の回収を行っているのだが、P86Sでは回収が徹底しなかった。そのため最後に行った「読解」と、その前の「文法」の時間が足りず、手がつけられなかった学生が出てしまった。P86Sでは時間がなくてできなかった学生がP86Aで得点を大きく伸ばしたことが「読解」の得点差の大きい原因の一つと考えられる。これは標準偏差の値が大きいこととも関係している。

「読解」の差と各下位テストの間にはそれぞれ有意な差が見られた。(「読解」と「語彙」($t=4.75$ $P<0.01$), 「読解」と「文法」($t=2.98$ $P<0.01$), 「読解」と「語彙」($t=2.92$ $P<0.01$), 「読解」と「聴解」($t=2.03$ $P<0.1$))

「読解」の次に平均の差の大きいものは「聴解」の8.5点である。「聴解」と「文字」の間に有意な差が見られた($t=2.25$ $P<0.05$) 「文法」の平均の差は7.5点。「語彙」の平均の差は5.6点であり、「文字」は4.8点と小さかった。

TABLE 1 下位テスト別得点差の平均と標準偏差

(単位：点)

| | 聴解 | 語彙 | 文法 | 読解 | 文字 |
|-------|-----|-----|------|------|-----|
| 差の平均 | 8.5 | 5.6 | 7.5 | 13.0 | 4.8 |
| S. D. | 7.3 | 6.6 | 10.6 | 12.1 | 5.1 |

次に、FIG. 1-1から1-6に合計と各下位テストの得点差を、P86Aの得点の低い順に並べた図で示す⁽²⁾。P86Sの得点が各棒の下の得点であり、棒の長さはP86SとP86Aの得点差を示している。色の濃いものはP86SよりP86Aの得点が下がったことを表す。この場合は棒の上がP86Sの得点となっている。

これらの結果をまとめると、次のようなことがいえよう。

- 1) 「合計」は、-15から+95の幅の得点差があった。この幅はかなり大きいといつて良いだろう。
- 2) P86Aの得点がP86Sの得点を下回る場合がある。「合計」では1名得点が下がっている。「文法」は5名、「文字」3名、「聴解」と「語彙」はそれぞれ2名、「読解」は1名得点が下がった。原因としては、以前習得していたはずのものができなくなった。四肢選択の問題で偶然できていた問題ができなくなった、ことなどが考えられる。
- 3) 得点差が大きい下位テストは「読解」であり、小さい下位テストは「文字」「語彙」である。また、得点差に個人差の大きい下位テストは「読解」「文法」であり、小さい下位テストは「文字」「語彙」である。これにはテストの実施方法の影響も含まれている。
- 4) 「聴解」はP86Sで低から中程度の得点であった学生のほうが高得点であった学生より伸び方が大きい。留学生が日本で生活しているということは、自然な言語環境が整っているといえる。言語習得の一部に意図的に学習する必要がないものがあるが、初級程度の「聴解」は、生活の中から習得していくものがあると思われる。
- 5) 「語彙」はP86Sの得点の上下による伸び方の差が小さく、伸び方自体も他と比べて小さい。「語彙」の獲得は時間がかかるものようである。
- 6) 「文法」も「聴解」と同様、高得点だった学生の伸び方が少ない。ちなみにP86Sで30点以下の学生は2名を除き順調に伸びているのに対して、30点以上であった学生9名のうち5名はP86Aの得点がP86Sと変わらないかまたは下がっている。他の得点と比べて天井効果の影響というよりは、伸び悩んでいると考えられる。

- 7) 「読解」はP86Aの得点が大きく伸びているが前述したように、テストの実施方法の影響が関わっていると思われる。
- 8) 「文字」はP86Sの得点が低かった学生の伸び方が少ない。5点以下だった学生12名のうち6名は変わらないか、もしくは下がっている。一方、10点以上の学生は1名を除き順調に伸びている。つまり「文字」は、初級あたりでは他の下位テストと比べてかなり習得が難しいといえよう。カタカナが正確に書ければ5点は取れるはずなのだがそれ以下でストップしているケースが何名かみられる。漢字圏非漢字圏という母国語との関係も大きいと思われるが個々のケーススタディで検討する。

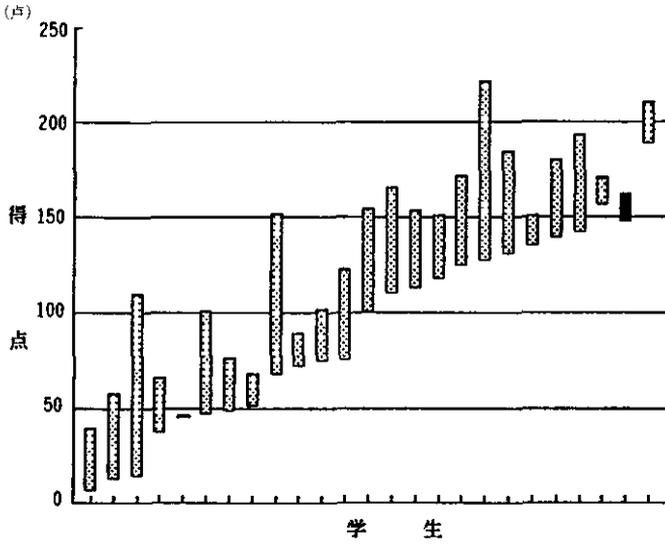


FIG.1-1 P86AとP86Sの得点差 (合計)

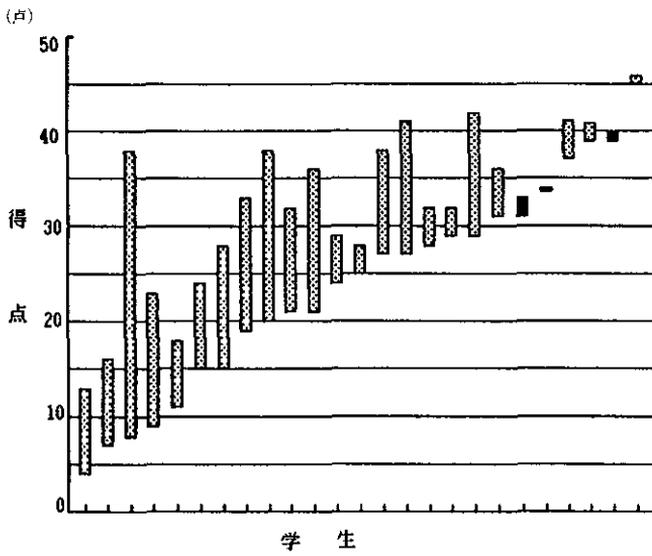


FIG.1-2 P86AとP86Sの得点差 (理解)

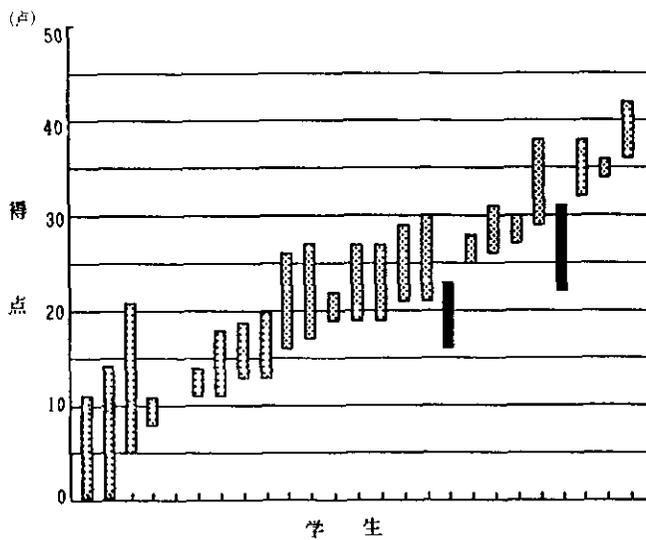


FIG. 1-3 P86AとP86Sの得点差 (語彙)

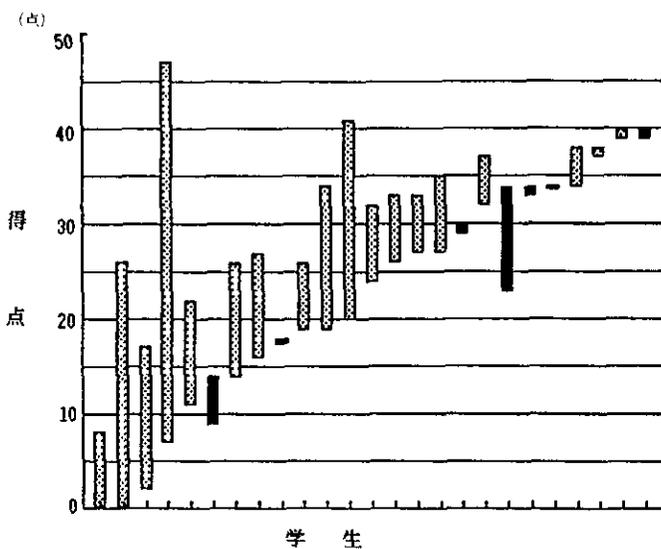


FIG. 1-4 P86AとP86Sの得点差 (文法)

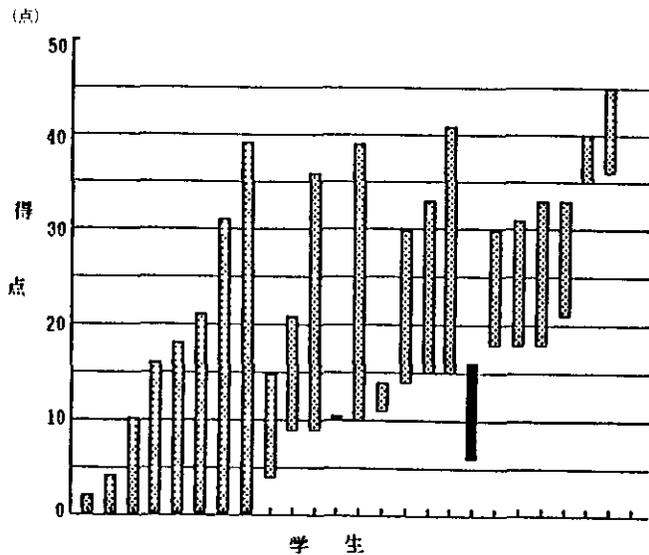


FIG.1-5 P86AとP86Sの得点差 (数字)

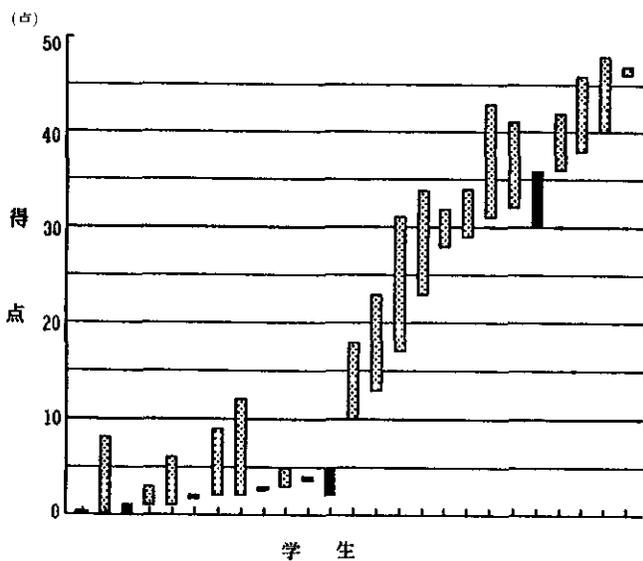


FIG.1-6 P86AとP86Sの得点差 (文字)

2. ケース・スタディ

以上みてきた下位テスト別考察を学習者1人1人について、検討してみたい。まず、P86AとP86Sの合計得点の差と25名の差の平均を比較し、差の平均を上回った学生を伸びたグループ、平均を下回った学生を伸びないグループに分ける。次に、学生の得点の型が同じグループに属すると考えられる場合はできるだけこれをまとめる。各下位テストの得点傾向から日本語の能力タイプとして主なものを以下のように分類、命名した。図は右から「聴解」、「語彙」、「文法」、「読解」、「文字」の順に表すことにする。(FIG 2)

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| 1 平型 | 5つの下位テスト間の差が小さい。 |
| 2 聴解型 | 「聴解」が最も高い。 |
| 3 文法型 | 「文法」が最も高い。 |
| 4 聴解文法型 | 「聴解」が高く、「文法」がそれに次ぐ。 |
| 5 聴解文法語彙型 | 「聴解」「文法」「語彙」が高く「読解」「文字」は低い。 |
| 6 右上がり型 | 「文字」が高く、「聴解」が低い |
| 7 その他 | 上記以外のタイプ(上記と同様に適宜命名した) |

P86Sの「読解」で回答紙から明らかに時間が足りなかったと思われるものについては(変形)という形で上記タイプに加えた。

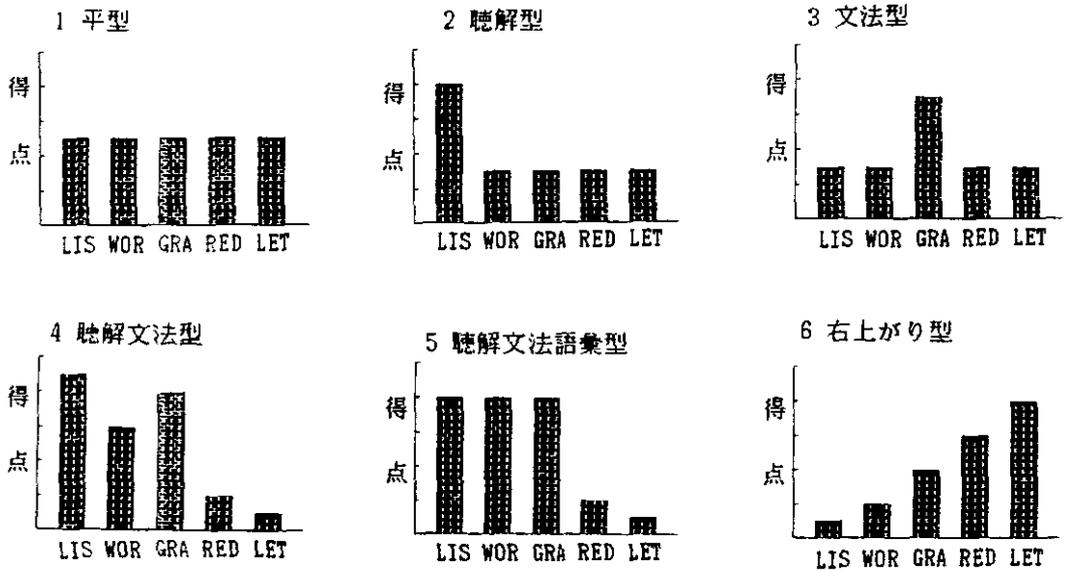


FIG.2 得点パターン

以下、ケースごとに、性別、出身、年齢、専攻を記し、次にコース名、日本語の能力タイプを表わした。続いて担当教師へのアンケートとインタビューおよび成績から得られた所見を記した。

筑波大学の日本語コースは次のようになっている。1コマは75分である。

| | | | |
|-------|--------------------------------------|------|-------|
| A コース | 集中日本語研修コース (6ヵ月後に専門教育を受ける大学へ送り出すコース) | 初 級 | 週22コマ |
| B コース | 外国人留学生等日本語研修コース | 初級後期 | 週10コマ |
| C コース | 外国人留学生等日本語研修コース | 中級前期 | 週10コマ |
| D コース | 外国人留学生等日本語研修コース | 中級後期 | 週10コマ |
| T コース | 教員研修プログラム日本語コース | 初級 | 週7コマ |

なお、1985年度までのコースの概要や使用教科書、教材等は堀口 (1986) に詳しく述べられている。⁽³⁾

1 伸びたグループ

1) 〈聴解型〉からスタート

P86Sで「聴解」が最も高い。「文字」は低い。P86Aでも「聴解」が高いことは変わらないが「語彙」「文法」「読解」が伸びている。

ケースA (女・アメリカ, 27歳, 哲学)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈聴解型〉 → 〈聴解型〉

P86Sでは「聴解」が特によかった。P86Aで「読解」「文字」が伸びてきた。

基礎がしっかりしている。86年春学期にはBコースの漢字の授業にも出席、成績はA。86年秋学期Dコースのなかで努力はしているが、文字の力が低く、そのため読解力も低い。Dコースになると漢字圏とのギャップが大きく、なかなかそのギャップは埋まらないようだ。古典の授業には力が足りない。

ケースB (男・アメリカ, 26歳, 地域)

86年春学期Bコース (Bコースが夏休みに入ってからAコース)

86年秋学期Cコース

タイプ 〈聴解型〉 → 〈聴解文法型〉

P86Sでは「聴解」が特に高かった。P86Aで「文法」「読解」「語彙」が大きく伸びた。「文字」は他と比べて低くほとんど伸びていない。

高校の英語教師として2年滞日した後にBコースへ。完全な耳型で話す面が強い。86年春学期の成績は「聴解」はA, 「作文」はB。作文に基本的な誤りが多い。

ケースC (男・イギリス, 24歳, 哲学)

86年春学期Tコース

86年秋学期Cコース (授業登録せず)

タイプ <聴解型> → <聴解型>

大きく伸びたうちの筆頭。特に「聴解」「文法」「語彙」「読解」の伸びが大きい。

ケースD (男・フィリピン, 26歳, 環境科学)

86年春学期Tコース

86年秋学期Bコース

タイプ <聴解型> → <聴解文法型>

P86Sでは「聴解」以外ではできていなかったがP86Aではそれぞれの下位テストで伸びた。コースの授業にはあまり出席していない。Tコースの積みあげていく授業の方式の方が、Bコースの自分で統合しなければならない授業のやり方よりも向いていたようだ。

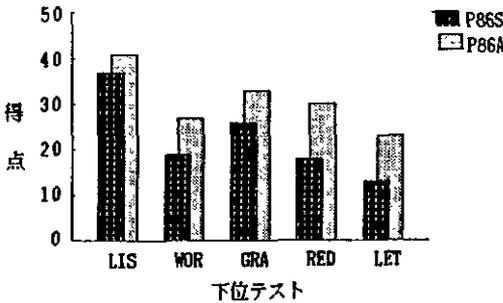


FIG. 3-1 ケースA

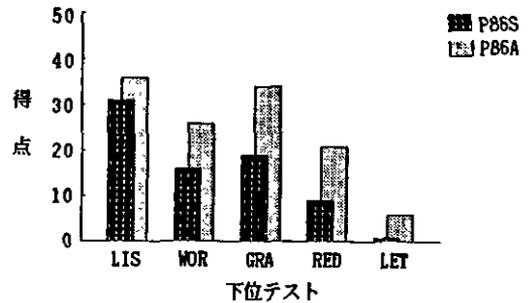


FIG. 3-2 ケースB

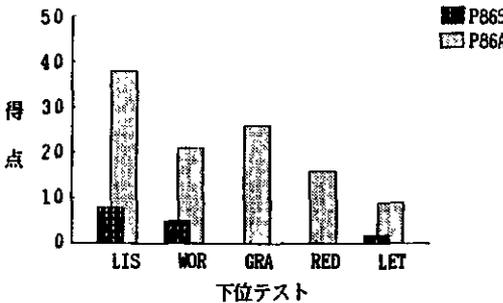


FIG. 3-3 ケースC

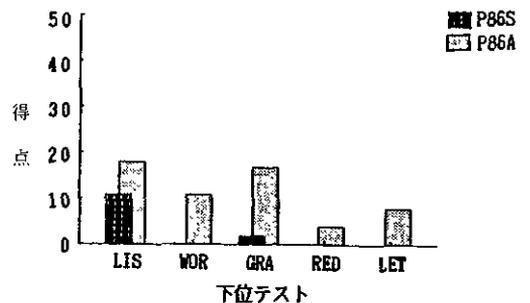


FIG. 3-4 ケースD

2) 〈文法型〉からスタート

文法が特によかったところに他の下位テストも追い付いてきたタイプ。

ケースE (男・タイ, 22歳, 日本文学)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈文法型〉 → 〈平型〉

P86Sでは「文法」が特に高かった。P86Aでは「文法」を除く各下位テストの伸びが著しい。

非漢字圏でありながら、特に「文字」で大きく伸びているのはかなりの努力の結果であろう。話すのは上手く大学内のスピーチコンテストで優勝している。基礎がしっかりしている所以他の下位テストも順調に伸びたのだろう。86年春学期はCコースであったが中ではトップクラスで教師によってはDでもよかったと見ている。86年秋学期Dコースでも上位である。

ケースF (男・ニュージーランド, 21歳, 日本語・言語学)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈文法型〉 → 〈聴解文法型〉

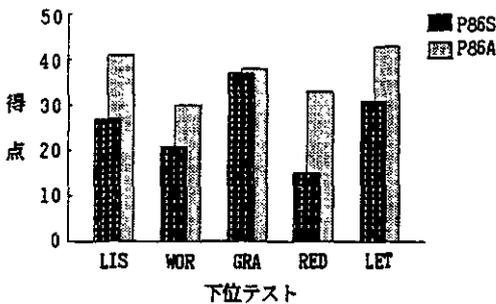


FIG. 3-5 ケースE

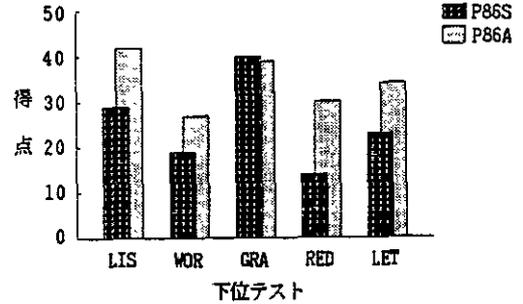


FIG. 3-6 ケースF

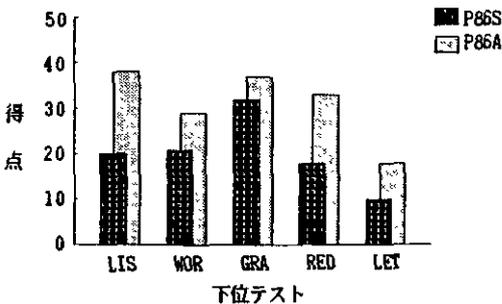


FIG. 3-7 ケースG

P86Sの「文法」が特に高かった。P86Aでは「聴解」「読解」は大きく伸びたが「文法」は少し下がっている。「文字」も伸びている。

「文法」がよかったことから分かるように基礎がしっかりしている。大変な努力家。86年秋学期の教師の評定も上位である。漢字系とくらべれば語彙は力不足だが読解力、理解力があり、それで補っている。

ケースG (男・韓国, 31歳, 理工)

85年秋学期 B コース

86年春学期 B コース

86年秋学期 C コース

タイプ 〈文法型〉 → 〈聴解文法型〉

P86Sでは「文法」が相対的によかった。P86Aではすべて伸びているが、特に「聴解」, 「読解」の伸びが大きい。しかし「文字」は弱く、漢字がほとんど書けていない。P86SでBコースになったが文型の授業は自主的にCコースに入った。表現力は豊富でBコースではものたりなかったようだ。

3) 〈聴解語彙文法型〉からスタート

P86Sで「聴解」「語彙」「文法」が並び「読解」「文字」が低い。

ケースH (女・韓国, 27歳, 歯学)

85年秋学期 B コース

86年春学期 B コース

86年秋学期 C コース

タイプ 〈聴解文法語彙型〉 → 〈文法読解型〉

P86Sでは「読解」「文法」「聴解」が高かった。P86Aでは「文法」「読解」「語彙」「聴解」が大きく伸びた。それに比較して「文字」の伸び方が低い。

86年春学期の成績は全教科A。まじめな努力家。

ケースI (男・ナイジェリア, 33歳, 農業機械)

85年秋学期 A コース

86年春学期 B コース

86年秋学期 B コース (授業登録せず)

タイプ 〈聴解語彙文法型〉 → 〈聴解文法型〉

P86Sでは「読解」「聴解」「語彙」が高かった。P86Aでは「文字」以外伸びている。86年春

学期の成績は「会話」はA, その他はB。大変熱心でやる気はあるが専門が忙しく授業にあまりでられなかった。話す力はあるが「文字」が問題。漢字を自分で練習しようとC A Iプログラムを借りて勉強している。

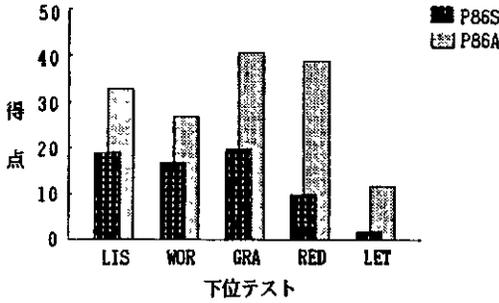


FIG. 3-8 ケースH

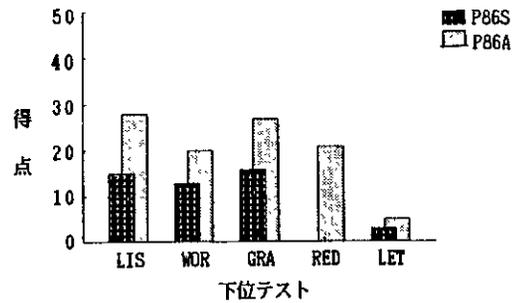


FIG. 3-9 ケースI

4) P86Sのテストに力が表れなかったタイプ

時間配分が悪く「読解」「文法」ができなかったがP86Aでそれを補った。

ケースJ (女・タイ, 28歳, 日本語)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ <平型(変形)> → <平型>

P86Sでは時間が足りず「読解」全部と「文法」の4分の3は無解答であった。P86Aでは全下位テストにわたり高得点である。

P86Sのときプレースメントテストの結果Cコースになり本人はショックだった様子。おとなしくまじめな性格。86年春学期はBコースの「漢字」にも出席し、成績はA。慎重型で時間がかかるため実力がテストに反映されない面がある。86年秋学期はDコースの中でも上位である。

ケースK (男・台湾, 32歳, 経営)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ <右上がり型(変形)> → <右上がり型>

P86S「読解」は時間配分の問題。P86Aで「読解」に加え「聴解」が伸びた。「文法」、「語彙」はあまり伸びていない。

熱心に日本語に取り組んでいるが「語彙」、「文法」の伸びに反映していない。「文法」の基礎的な部分が欠けている。要領を掴むのがうまくない。勉強の仕方にも問題がありそうだが、日本語の問題というよりも言語を越えたところに問題があるかもしれない。

ケースL (男・台湾, 30歳, 歴史)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ <平型(変形)> → <平型>

P86Sでは時間が足りなくて「読解」が低かった。P86Aでその「読解」を補ったが他はほとんど伸びていない。本来ならば「伸びなかった」グループにはいるのだろう。長く日本語を勉強しているのに進歩がみられない。授業には出るがあまり努力はしていない。在日期間が長い

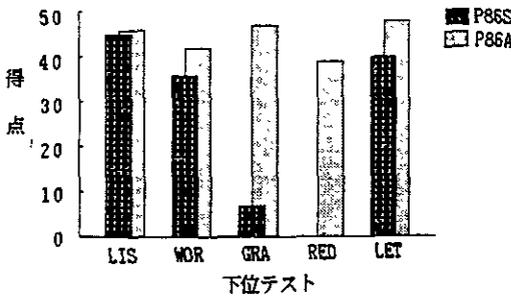


FIG.3-10 ケースJ

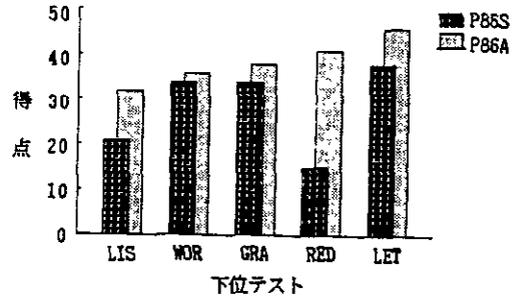


FIG.3-11 ケースK

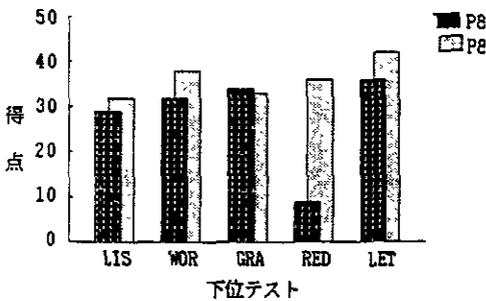


FIG.3-12 ケースL

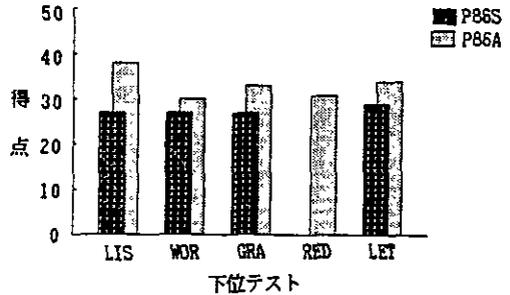


FIG.3-13 ケースM

で話すことには慣れているが不正確な面が多い。基礎が必要と思われる。

ケースM (女・台湾, 24歳, 芸術)

86年春学期Cコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈平型(変形)〉 → 〈平型〉

P86S「読解」は時間配分の問題。「聴解」は伸びているがその他の伸びが小さい。基礎的な文法項目が身につけていない。

2. 伸びなかったグループ

1) 〈聴解型〉でスタート

各下位テストがそれぞれ同じような割合でのびてはいるが、伸び方が小さい。全体のバタンは変わらない。

ケースN (男・インドネシア, 26歳, 農林)

85年秋学期Aコース

86年春学期Bコース

86年秋学期Bコース (授業登録せず)

タイプ 〈聴解型〉 → 〈聴解文法型〉

P86Sでは「聴解」「文法」が高かった。P86Aでは「文字」以外は同じような割合で少しずつ伸びている。全体の型は変わらない。やる気はあるのだが専門が忙しく授業に出られない。

ケースO (女・スペイン, 31歳, 医学)

85年秋学期Aコース

86年春学期Bコース

86年秋学期Bコース

タイプ 〈聴解型〉 → 〈聴解文法型〉

P86Sでは「聴解」が高かったが、P86Aで「文法」と「読解」が伸びた。「文字」は伸びていない。全体に伸び方が小さい。

Aコースの時は日本語の必要性を感じていなかったようであり熱心とはいえなかったが専門が始まってからやる気を出してきた。86年春学期の成績は「読解」はA, 「作文」はB。「文法」の力がまだ弱い。

ケースP (男・フィリピン, 32歳, 生物)

86年春学期Tコース

86年秋学期Bコース (授業登録せず)

タイプ <聴解型> → <右下がり型>

P86Sは「聴解」のみ7点であとは0点だったのがP86Aでは「聴解」「語彙」がそれぞれ16点、14点と上がった。しかし伸び方は平均以下である。

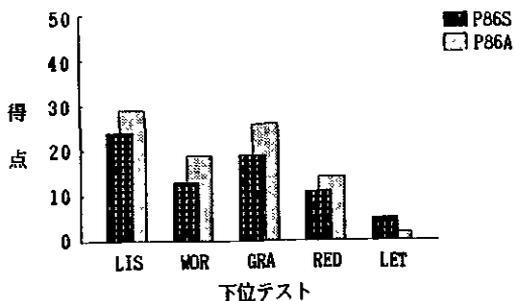


FIG. 3-14 ケースN

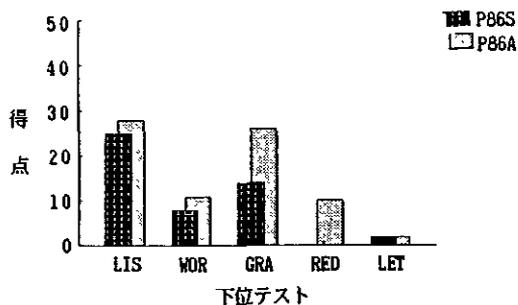


FIG. 3-15 ケースO

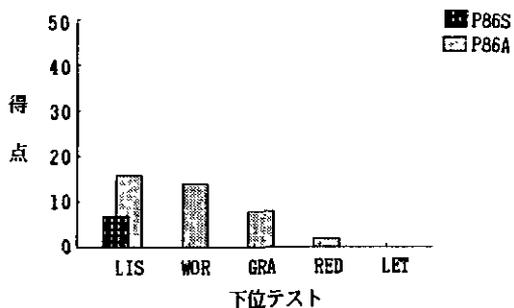


FIG. 3-16 ケースP

2) <文法型でスタート>

ケースQ (女・ブラジル, 31歳, 園芸)

86年春学期Bコース

86年秋学期Bコース

タイプ <文法型> → <聴解型>

P86Sでは「文法」が相対的に高かった。P86Aで

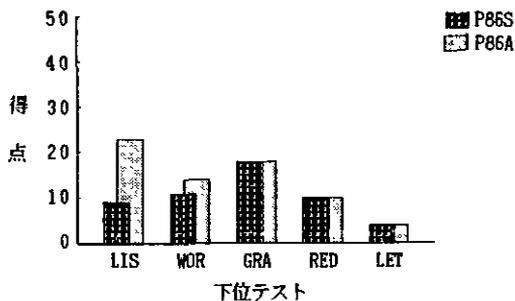


FIG. 3-17 ケースQ

「聴解」は伸びたが他はほとんど変わらなかった。

86年春学期Bコースの時は他の学生と比べてレベルが低すぎて授業がやりにくかった。86年秋学期Bコースでは会話力はついてきたが漢字はBコース以下。

3) 〈聴解語彙文法型〉でスタート

基礎が足りなくて頭打ちのタイプ。

ケースR (女・台湾, 26歳, 経営)

86年春学期Cコース

86年秋学期Cコース

タイプ 〈聴解語彙文法型〉 → 〈平型〉

P86Sでは「文法」「聴解」「語彙」が高かった。P86Aで「読解」「文字」が伸び得点が平均化した。基礎的な文法能力に欠けたまま難しい専門書を読まなければならない状況にある。86年秋学期Cコースの中では漢字、語彙に関しては上位。

ケースS (女・イラン, 28歳, 生物)

85年秋学期Tコース

86年春学期Bコース

86年秋学期Bコース (授業登録せず)

タイプ 〈聴解型〉 → 〈聴解語彙文法型〉 → 〈聴解文法型〉

3回ブレースメントテストを受けている。P85Aのときは「聴解」のみできていたのがP86Sでは「語彙」「文法」も伸びて聴解語彙文法型になった。P86Aでは「聴解」「文法」「読解」が

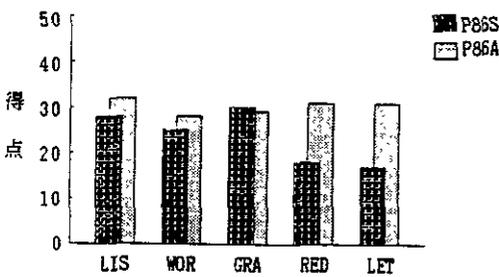


FIG.3-18 ケースR

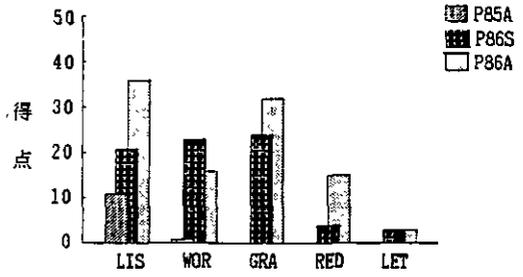


FIG.3-19 ケースS

伸びた。「語彙」は下がり「文字」は低いままである。

Tコースのときは順調に伸びていた。着実に順を追った学習のしかたが向いているようでBコースは合わなかったようだ。耳は良い方。「文字」はTコースのとき重点を置いていなかったのでP86Sが低いのは仕方がないがその後もあきらめてしまっている。プレースメントテストの結果86年秋学期で再びBコースになりやる気を失ってしまった。

4) 〈平型〉だったが伸び悩んでいるタイプ

ケースT (女・台湾, 32歳, 教育)

86年春学期Dコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈平型〉 → 〈平型〉

P86Sでは「語彙」「文字」の少し低い平型だったが、P86Aでほとんど変わらず、全下位テストに渡って進歩が見られない。特に「文字」が弱い。86年春学期にDコースになったが過半数の教師はDでは無理だったと評価している。86年秋学期のDコースでも、読解の授業は無理だったようだ。Cコースの作文と読解を受けていたがレベルはCの中位で、適当であった。

ケースU (女・台湾, 24歳, 芸術)

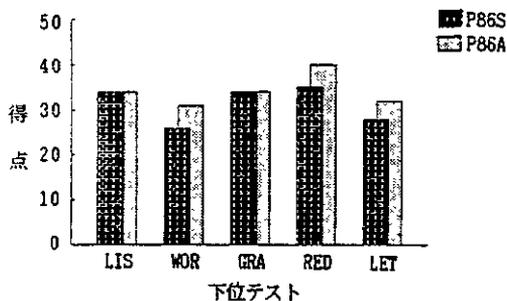


FIG.3-20 ケースT

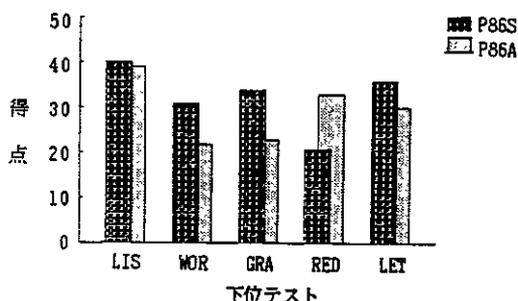


FIG.3-21 ケースU

85年秋学期Cコース

86年春学期Dコース

86年秋学期Cコース

タイプ 〈平型(変形)〉 → 〈その他〉

P85Sでは「読解」の低い平型であったのがP86Aでは「読解」以外すべて得点が下がっている。P86S, P86Aとも「聴解」がもっとも良い。86年春学期のDコースもとてもむりだったとの評価がでている。基本的なところが抜けていて、全体に力がない。予習も不十分で努力が足りない。視覚型の学生。

5) その他

ケースV (女・香港, 23歳, 言語学)

85年秋学期Dコース

86年春学期Dコース

86年秋学期Dコース

タイプ 〈聴解語彙文法型〉 → 〈文字型〉 → 〈平型〉

P85Aから3回続けて受けている。P85Aでは「聴解」, 「文法」, 「文字」の高い型だったが, P86Sでは特に「文字」と「読解」が伸び, P86Aでは「読解」と「語彙」が伸びて平均化されやや右あがり型になった。全体的に高得点で天井効果の影響もあると思われる。積極的で真面目な性格。85年秋学期Dコースの成績はCであったが86年秋学期の教師の評価はクラスで上位になっている。

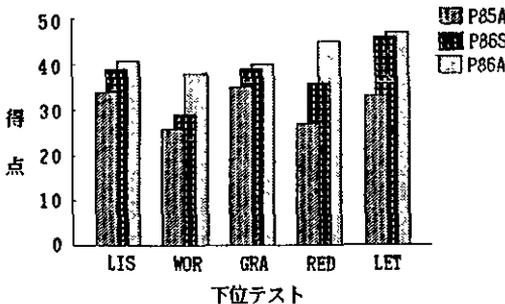


FIG.3-22 ケースV

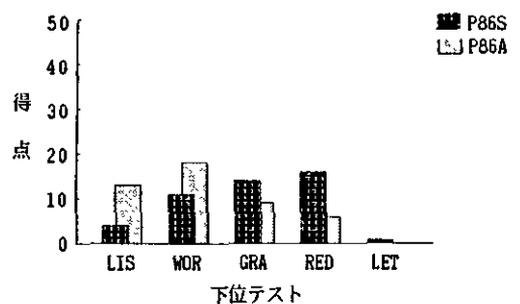


FIG.3-23 ケースW

ケースW (女・メキシコ, 32歳, 看護学)

85年秋学期 A コース

86年春学期 B コース (夏の間は A コース)

86年秋学期 T コース

タイプ 〈その他〉 → 〈語彙型〉

P86SとP86Aの合計得点は同じ。P86Sでは「読解」が最もよく、「法」「語彙」と続く。P86A「読解」「文法」は下がり、「聴解」「語彙」が伸びた。「文法」が混乱している。「文字」がほとんどできない。86年春学期 B コースでの教師の評価はすべて C であり、コースには「不適当」であった。86年秋学期に T コースに入り初級から始めたが出席も少なく下位。英語ができないため説明や指示が分からないことがハンディとなっている。長く日本語を勉強しているがなかなか伸びない。

3. 全体の考察

2 のケース・スタディでは P86S をスタートとしてまとめたが、学生によっては P86S の前の型も当然存在する。しかしここではあえて、ある時点から 6 ヶ月後の時点という面でもとらえることにした。

P86S では「聴解型」と「文法型」の学生が多かった。伸びたグループでは「聴解型」は P86A でも「聴解」の優位性は変わらず「文法」その他が伸びてきた。「文法型」の場合は「文法」はあまり伸びず、代わりに他の「聴解」「語彙」「読解」「文字」が伸びて「文法」に追い付く形になった。

伸びなかったグループでは、独自のパターンを示すケースが多くみられた。また伸びたグループと同様のタイプだが伸び率が低かった場合もある。個人の特性、能力の影響に加え、種々の理由による日本語学習に対するモチベーションの違いが大きいようだ。

Ⅳ. ま と め

以上、プレースメント・テストを題材に日本語習得の一過程をみてきた。個々のケースを追っていくとさまざまな問題が明らかになってきた。そのうちのいくつかを問題点として挙げておく。

1. プレースメント・テストの形式と内容について

プレースメント・テストの形式に慣れないために、実力が発揮できず、コースが低すぎて合わなかったケースがあった。

一定時間内にある程度の量をこなすという型のテストは一般に広く行われており、慣れておくことは必要だが、プレースメント・テストとして用いるには適当でない学生のケースもある。今後は実力をより正しく反映するテストを開発していきたい。また、現在のプレースメント・テストでは測れないプロダクションの能力も何らかの形で取り入れる必要があるだろう。

2. プレースメント・テストに関わる動機づけの問題について

言語学習で「動機づけ」の重要さは疑うところがないが、良い方向で働くように意識的な操作も大切であろう。

2回目のプレースメント・テストの結果、前学期と同じコースになり、急に学習意欲を失った学生があった。半年の間勉強してきたことが役に立たなかったと思うと同時に、再度同じコースに出たくないという理由で授業から離れてしまったようだ。学生のコース分けは、絶対的な学力の基準ではなく、学期ごとの学生数によって変わってきているのが現実である。他のコースの授業でも、学生が必要とすれば、教師の許可を得て出席できるようにはなっているが、それをせずにドロップアウトしてしまう学生も多い。ドロップアウトする学生が少なくなるよう教師が学生一人一人の気持ちを理解し適切な助言を与える体制が待たれる。

3. コース運営と学生の適性について

A T I（適性処遇交互作用）研究ではそれぞれ学生の特性に合った教授法の研究が進められている⁽⁴⁾。学生の中には一つ一つ積み上げていくようなシステムティックな授業の方が向いており、自分で学習内容を統合していくやり方は合わないと思われる者もあった。また逆の場合もあろう。もっとも、効率的な教授法は一個人内でも教育目標、教科などの条件によって変わってくるが、学生のタイプ、特性と習得効率の問題が今後の課題として残っている。

注

(1) テスト結果の処理・データの分析は、三枝令子、川原裕美、酒井たか子が担当した。三枝令子「プレースメント・テスト統計的処理の試み」（本論集）を参照。

(2) グラフ作成には、NEC OfficeGraph (Ver2.0) を用いた。

(3) 堀口純子 1986「筑波大学における日本語教育その十年」（『筑波大学留学生教育センター日本語論集』P89-109

- (4) 三浦香苗 1981「適性にあわせて」磯貝芳郎編著『教育心理学の世界』第8章 福村出版
P208

参考文献

- (1) DULAY, H, BURT, M AND KRASHEN, S 1982 LANGUAGE TWO · Oxford University Press New York,
(牧野高吉訳 1984「第2言語の習得」弓書房)
- (2) 三枝令子「プレースメント・テスト統計的処理の試み」(本論集)
- (3) 羽鳥博愛他 1980「学習者中心の英語教育」大修館
- (4) 堀口純子 1986「筑波大学における日本語教育その十年」(『筑波大学留学生教育センター
日本語論集』)

(本論文は、昭和61年度筑波大学学内プロジェクト研究からの援助に基づくものである。)